

論文要約

イギリスのメディア教育論に関する研究
ー D.バッキンガムによる参加型メディア教育の
理論と実践ー

時津 啓

I 論文題目：イギリスのメディア教育論に関する研究

—D.バッキンガムによる参加型メディア教育の理論と実践—

II 論文構成

序章 研究の課題と先行研究の検討

第1節 研究の課題

第2節 先行研究の検討

第3節 各章の概要

第1章 イギリスのメディア教育論におけるバッキンガムの位置

第1節 バッキンガムの立場とイギリスにおけるメディア教育の特徴

第2節 高級文化／労働者階級の文化を保護するメディア教育論

第3節 メディア教育を取り巻く 1980年代、1990年代の政治的・文化的状況

第4節 バッキンガムによる参加型メディア教育の歴史的な位置づけ

小括

第2章 メディアの教材利用と文化形成の連続性

第1節 初期ホールの理論的立場—「ポピュラー芸術」運動へ至る経緯—

第2節 「ポピュラー芸術」運動の歴史的な位置づけ

第3節 ウィリアムズとホール

第4節 批判的なメディア利用へ向けて

小括

第3章 バッキンガムにおける抑圧／自律の二元論とその学校教育論としての可能性

第1節 バッキンガム・マスターマン論争

第2節 学校教育論への応用

第3節 二元論の両義性

小括

第4章 メディアの拘束に対する抵抗可能性

第1節 参加型文化論とメディア教育—ジェンキンスとの比較—

第2節 バッキンガムの着眼点とメディア制作の教育

第3節 教育哲学におけるメディア概念—今井康雄を中心に—

第4節 (マス) メディア内存在の生徒によるメディア教育

小括

第5章 参加型メディア教育の政治的展開

—イギリス黒人の文化形成とバッキングラムによる教育実践の再解釈—

第1節 言語とシティズンシップ教育

第2節 言語と人種

第3節 政治的参加型メディア教育の実践

小括

第6章 参加型メディア教育の文化形成的展開

—フレイレの理論展開とバッキングラムによる教育実践の再解釈—

第1節 ジルーのポピュラー文化への接近—境界教育学におけるポピュラー文化論—

第2節 バッキングラムとジルー

第3節 フレイレの意識化概念とフェミニストからの批判に伴う理論展開

第4節 文化形成的参加型メディア教育の実践

小括

第7章 政治的／文化形成的参加型メディア教育としての可能性

第1節 もう一つの公共圏における／「編集者」としての生徒によるメディア教育

第2節 メディア教育における学習概念の再考

小括

終章 参加型メディア教育の可能性と課題—新たなメディア教育のために—

第1節 総括—参加型メディア教育の特徴—

第2節 新たな示唆

参考文献

関連年表

本研究の関係図

Ⅲ 各章の概要

序章 研究の課題と先行研究の検討

本研究の目的は、イギリスのメディア教育学者デイビッド・バッキンガム (David Buckingham 1954-) のメディア教育の理論に注目し、マスメディア時代に展開されたメディア・テキストを批判的に読み解くメディア教育をこえて、生徒がメディア・コンテンツを制作する参加型メディア教育の可能性と課題を解明することにある。とりわけ、イギリスのメディア教育論上にバッキンガムの試みを歴史的、理論的に位置づける。そしてバッキンガムによる教育実践を再解釈することを通して、抑圧からの解放としてのメディア教育ではなく、現実構成としての学習が有する可能性を明らかにする。

本研究が言うメディアとは、基本的にはマスメディア (テレビや新聞等) のことである。また参加型メディア教育とは、生徒が記者やプロデューサーに扮して経験的、擬似的にメディア・コンテンツ (テレビ番組や新聞・雑誌記事等) の制作に参加する教育のことである。

バッキンガムの試みは、理論的にはカルチュラル・スタディーズの影響を受け、社会的政治的には、M.サッチャー政権が進めたメディア教育のカリキュラム化の中で進行した。彼は、このような理論的、社会的条件の下で現職教員らと共同研究を行い、ユネスコの活動とも接続することで、メディア教育を一定の方向へと導いた。本研究がバッキンガムに注目するのは、イギリスのメディア教育論の展開を考える際、彼が理論的社会的歴史的に重要な結節点に位置づき、現代のメディア教育論に決定的な影響を与えたからである。

彼に関する先行研究は大きく三つに分けることができる。第一に、バッキンガムの試みをメディア・リテラシー論の文脈で捉える研究である。ここでバッキンガムの試みはオーディエンスに関する楽観論 (R.Ferguson 1996) と見做され批判される。生徒が制作したものはメディアの模倣に過ぎず (B.Ferguson 1981, Stafford 1990)、バッキンガムはメディアのイデオロギー性に対してあまりに自覚がなさすぎると批判される (上杉 2008)。第二に、視聴覚教育、教科教育学では、映像教材の特性にしたがった国語科の授業や批判的な能力を評価するために、バッキンガムの「有効性」を検討している (砂川 2011, 森本 2014)。第三に、カルチュラル・スタディーズの文脈にバッキンガムの試みを位置づける研究である。これらは、ニュー・レフト運動やオーディエンス研究の延長線上にバッキンガムのメディア教育理論を位置づける (Luke 2003, Martinez-de-Toda 2003, Turner 1990)。

しかしながら、それぞれの立場には次のような問題がある。第一の立場は 1980 年代にバッキンガム自身が設定したメディアのイデオロギー性／生徒の自律性という解釈枠組みにバッキンガムを当てはめ、二者択一を迫っている。このような二者択一を求める限り、解釈枠組みの成立した経緯やその変遷を明らかにできない。このことはイギリスのメディア教育論におけるバッキンガ

ムの位置づけを看過し、単純なメディア教育の理解へとつながってしまう。第二の立場は、教育実践への「有効性」に限定した問いを設定してしまうため、彼のメディア教育が有するイギリス固有の歴史的社会的文脈を軽視し兼ねない。イギリス固有の文脈にバッキンガムを位置づけることによって、より生産的なバッキンガム理論の応用可能性や限界を明示することができよう。第三の立場は、バッキンガムの理論構築や理論展開に彼の教育実践がどのように影響を与え、逆に教育理論がどのように教育実践へと具体化されたのか。主に 1990 年代にバッキンガムが現職教員らと共同で試みている教育実践がバッキンガム理論に与えた意義を明らかにしていない。

以上を踏まえ、1980 年代後半から 2000 年代前半のイギリス固有の社会状況や思想的流れの中で、バッキンガムはいかにメディア教育理論を刷新し、いかなる教育実践を展開したのか。本研究は、彼の参加型メディア教育の理論と実践を歴史的に位置づけ、理論的にその意味を検討した。

第 1 章 イギリスのメディア教育論におけるバッキンガムの位置

L.マスターマンをはじめ多くのメディア教育学者は、F.R.リーヴィスと D.トムソンにイギリスにおけるメディア教育の源流を求めてきた。彼らが共に、メディアやポピュラー文化を教材として活用し、それぞれジャーナリスト教育を推奨し（リーヴィス）、政治的プロパガンダを問題視する学校教育論を展開するからである（トムソン）。その他にも、生徒の経験と既存の知識・技術を重視し、社会批判を唱える A.ニールらイギリスにおける新教育運動、労働者階級における文化の自律性を説いた R.ホガートにも、参加型メディア教育との連続性を確認できる。しかしながら、バッキンガムの試みとこれらとの連続性は部分的なものであり、その文脈やメディア教育を必要と考える理由も異なっている。

そこで、バッキンガムが活躍した 1970 年代後半から 1990 年代における社会状況に注目した。1980 年代を中心に政権を担ったサッチャーは、戦略的にメディアを利用して、従来の保守党と労働党の対立を前提とした政治風土を揺るがし、既存の労働者階級というカテゴリーを組み替えようとした。そのため、マスターマンをはじめとしたメディア教育学者はサッチャリズムに対する抵抗を掲げ、メディア批判を重視する。しかしながら、皮肉にもサッチャー政権において、メディア教育のカリキュラム化は進行する。具体的には、1990 年サッチャーが政権を退いた年にメディア教育は 11 歳から 14 歳の英語科ナショナル・カリキュラム「読解」領域に位置づく。それに伴い、BBC 等が新たな教育方法、新たな教材を次々と提供した。メディア教育学者は、「抵抗としてのメディア教育」から「制度としてのメディア教育」へとシフトチェンジを求められた。そしてデジタル技術の普及は「情報提供者—情報受信者」という図式では理解不能なコミュニケーションをもたらした。また、この時期はパンクロックの登場やレゲエの浸透など若者たちが伝統文化に抵抗し新たな文化を形成した時期でもある。

バッキンガムはそのような時流にのる形でマスターマン批判の急先鋒として頭角を現すことに

なる。複雑かつ矛盾した社会的な諸条件が偶発的かつ政治的に結びつき、バッキンガムのメディア教育論は展開された。

第2章 メディアの教材利用と文化形成の連続性

上述したような社会状況を考える時、S.ホールは重要な存在である。バッキンガムも含め多くのメディア教育学者は、リーヴィスらと同様に、ホールも保護の対象（映画）を特定し、美学的なメディア理解を行ったと見做している。ホールらが1960年代に行った「ポピュラー芸術」運動はその典型である。

ここでホールの理論展開に焦点を当てよう。ホールが「ポピュラー芸術」運動を展開した時期は、テレビ黎明期に当たる。M.マクルーハンが1964年の『メディア理解』においてテレビの可能性を宣言した。ホールらによる『ポピュラー芸術』も同年に出版されている。さらに、ホールが『ポピュラー芸術』を出版した1964年に労働党は政権を奪取した。中等教育学校の改革が遂行され、その制度は単線化へと進んだ。これまでの制度なら別々の学校に通っていた生徒たちが同じ教室で学ぶようになった。教師らは階級の混在した教室における授業実践を要求された。そのため、生徒らの共通項として存在するメディア、とりわけテレビは教師にとって無視できるものではなかった。

初期のホールは、テレビの時代の到来、中等教育学校の改革と呼応して、メディアの教材化を図った。当初、彼はR.ウィリアムズが考える唯物論的なメディア観の応用を模索した。しかしながらその後、1970年代から1980年代にかけて若者たちの文化形成を解釈するようになる。例えば、パンクはワッペン代わりに安全ピンを破れた服に着用する。この現象からホールが見出したのは、物質レベルでメディアと関係を結び、独自の文化を形成する若者たちの姿であった。物質レベルにおけるメディアと生徒（若者）の関係とは次のようなものである。例えば、本を読む行為において、読者は単に内容を理解するだけでなく、パラパラめくりや目の動きに合わせたページめくりなど物質レベルで本と関係を結ぶ。この関係こそ、物質レベルにおけるメディアと生徒の関係である。

この時期のホールは、美学的な識別能力の育成だけではなく、ウィリアムズから唯物論的メディア観を踏襲し、学習を通して物質レベルでメディアと関係を結ぶ若者たちに注目した。そして、メディアの批判的利用（メディア学習）を通して積極的に文化形成に関与する若者の姿を見出す。パンクの文化形成はメディア学習を内包している。若者たちは、学習を通してメディアと物質レベルの関係を構築し、それをベースに文化形成へ関与する。ここにテキスト（教材）分析をこえる意味で参加型メディア教育の原型を見出すことができる。

第3章 バッキングラムにおける抑圧／自律の二元論とその学校教育論としての可能性

バッキングラム・マスターマン論争は、メディアと生徒の関係を論争の出発点とする。バッキングラムは、メディア特性論（メディアはイデオロギー性を有しているかどうか）、メディアと生徒の関係論（生徒がメディアのイデオロギー性に対して自律性を有しているか）を結びつけ、抑圧／自律の二元論を構成した。つまり、抑圧／自律の二元論とはメディアと生徒の関係を抑圧的と捉えるか、それとも自律的と捉えるかにメディア教育の原理を見出す議論のことである。そしてバッキングラムは、次のようにこの二元論を変更していく。

第一に、バッキングラムは抑圧／自律の二元論をマスターマン批判に利用する。バッキングラムによれば、マスターマンにとって教師はメディアのイデオロギー性を読み解く存在であり、その影響の外に配置されている。その結果、生徒の読みは教師のそれと同一化することを強いられる。第二に、バッキングラムは抑圧／自律の二元論を教育方法論の差異として利用する。マスターマンのメディア教育がメディア批判（読むこと）を重視するのに対して、自らはメディア制作（書くこと）を重視する。このようにバッキングラムは抑圧／自律の二元論を原点にして、マスターマンとの差異を二分法で強調していく。

2000年代に入ると、バッキングラムとマスターマンは共に、抑圧／自律の両義性を唱えるようになる。つまり、メディアと生徒の関係は抑圧／自律のいずれかに特定できるものではなく、抑圧かつ自律していることを強調するようになる。このような変化の要因の一つは、メディア教育のカリキュラム化が定着したことだろう。例えばBBCは、この動向に呼応して、豊富なメディア・コンテンツを教材として提供し、教員研修にも参画して教育方法にも関与する。マスターマンにとっては批判の対象であるメディアがメディア教育と協力関係を結んでしまったと言えよう。

しかしながら、マスターマンはメディアの抑圧から生徒を解放することを求める。このことは、メディアと生徒の関係が抑圧関係であることを前提とするため、彼が唱えるようになった抑圧／自律の両義性と矛盾し、隘路に陥ってしまう。それに対してバッキングラムは、メディアと生徒の関係が抑圧／自律の両義性を有するがゆえに、メディア制作の授業実践へ参加できる（すべき）と考える。メディアと生徒の関係は、所与のもの（抑圧あるいは自律）としてあるわけではない。メディア制作を通して、生徒らは漸進的にメディアとの関係を構築する。バッキングラムは若者による批判的なメディア利用（メディア学習）だけでなく、教師の働きかけや教師とのかかわり（メディア教育）を重視するのである。

第4章 メディアの拘束に対する抵抗可能性

H.ジェンキンスによればメディア教育は、個人の自己表現に必要なスキルではなく、現実や他者と関わる社会的スキルを育成すべきと説く。バッキングラムも生徒たちがメディア制作を行う際、創造性という個人的でロマンティックな概念ではなく、社会的な対話という形式の重要性を強調

する (Buckingham, Grahame and Sefton-Green 1995:13)。

そして、この社会的な対話を実現するために必要なことが、生徒による振り返りを重視した概念学習である。生徒らはメディア制作を通して、例えば制作、言語、表象、オーディエンスといった諸概念を学んでいく。この学びによって、生徒は、受け取る知識に対してコンスタントに疑問を投げかけ、自らの経験をすすんで振り返るようになる。概念学習は、諸概念の獲得を通して現実構成のプロセスを認識し直す学びと言えよう。バッキンガムによる参加型メディア教育は、振り返りを重視した概念学習によって、メディアと生徒の関係を更新し続けることを可能にする。そして生徒は、それを通して、抑圧から解放されるだけでなく、社会的に現実を構成する可能性を有する。ここにバッキンガムはメディアへの抵抗可能性を見出す。そしてこの点こそ、バッキンガムの参加型メディア教育の可能性である。

次に、今井康雄の試みに注目しよう。今井によれば、生徒は常にすでに(マス)メディア内存在であり、生徒たちが作り出す社会的現実も言語をプロトタイプとするメディア内部で構成されていると解釈できる。今井はコミュニケーションを媒介する存在としてメディアを捉える(今井2004)。このメディア観にしたがえば、まず言語を中心としたメディアを介したコミュニケーションが先行し、教育行為、経験、主体等は後続してメディアによって構築されると解釈できよう。

この視点からバッキンガムの試みを解釈するならば次のようになる。バッキンガムはメディア内存在として教師、生徒を捉え、生徒のメディア経験が常にすでにメディア内部で生じていることを強調する。しかしながら、バッキンガムは例外的に生徒による振り返りをメディアの外部に設定してしまう。つまり、振り返りを特別視する。その結果、メディアが振り返りも含めた人間の意識を構築していることを十分に検討できていない。

そこでホールを中心としたオーディエンス研究に注目した。彼らにしたがえば、一方でメディアは様々な枠組み—流通ルート、スポンサーの意図など—に制約されて情報を発信する。他方で、オーディエンスもメディアの浸透や家族構成、ライフスタイルに応じてその情報を解釈し意味を付与する。オーディエンスはメディアからの情報を手がかりに意味を付与するため、不均衡な関係を強いられている。しかしながら同時に、その情報を受信するまでに様々な枠組み、すなわち制度へ介入することができる。とりわけ参加型メディア教育においては、実際に授業内で社会的現実を構成する。このことは、情報の送受信の枠組み(制度)を作り変える可能性を有する(政治的プロジェクト)。そして同時に、コンテンツ制作と結びつく可能性も有する(文化形成的プロジェクト)。

第5章 参加型メディア教育の政治的展開

—イギリス黒人の文化形成とバッキンガムによる教育実践の再解釈—

本章は、政治的プロジェクトとしてのメディア教育の可能性を検討した。ここで言う政治的プ

プロジェクトとは、情報の送受信の枠組みに権力性を見出し、その枠組みと折衝する試みのことである。

まず、J.ハーバーマスの公共圏概念に注目した。彼によれば、18世紀のコーヒーハウスやサロンにおいては、個人的な利害関係や利潤、政治的な立場の差異をこえて、公衆らが公共的な討論を行っていた。ここにハーバーマスは公共圏の「原風景」を見出す。言語に依拠した政治主体（シティズンシップ）の構築という意味で、ハーバーマス理論とシティズンシップ教育には連続性がある。この政治主体は、言語を使用したコミュニケーションを通して、単に意思疎通を図るだけではなく、規範意識を構築し、公共圏を作り出す。しかしながら、言語を中核に据えた公共圏の構築を構想する限り、少数派（移民や母国語の異なる児童・生徒）の排除という困難が付きまとう。そのため、ハーバーマスの視座にしたがいつつも、言語以外のメディアを使用した政治的なプロジェクトを模索する必要がある。

バッキンガムによる人種の表象をめぐる教育実践を取り上げよう。英語の授業で、14歳の男子6人が11歳向けにホームコメディの予告編を制作した。ここではジェンダー、人種の偏見に満ちたキャストが行われた。当然であるが、クラスメイトや教師らは彼らの作品を批判した。中には自らの人種を自嘲的に演じる生徒もいたため、この作品は悪ふざけの類と解釈された。しかしながら、制作活動、クラスメイトや教師との対話を通して、制作者たちは自らの偏見に気が付き始めた。

ここでホール後のカルチュラル・スタディーズをリードするP.ギルロイに注目した。彼によれば、イギリス黒人らは、楽器、アナログレコードなどの物質を使用して文化を形成する。例えばDJらが表現者であるためには、ターンテーブルにアナログレコードをのせて回しつつ、観衆（消費者）と共にリズムに合わせる必要がある。表現者であるDJらと観衆（消費者）の関係は対話的であり、観衆も参加者としての役割を担う。

この観点からバッキンガムの教育実践を解釈すると、バッキンガムも十分に捉えきれていない参加型メディア教育の側面が明らかになる。メディア教育において、生徒らは自らのメディア経験やメディア利用を振り返るだけではない。生徒らはメディアを使用した作業を行っている。イギリス黒人と同様に、生徒らもメディア制作という共同作業を通して規範意識を構築する可能性がある。参加型メディア教育には言語を介したコミュニケーションを通して形成されるハーバーマスの公共圏とは異なった、共同かつ文化的作業を介したもう一つの公共圏を構築する可能性がある。

第6章 参加型メディア教育の文化形成的展開

—フレイレの理論展開とバッキンガムによる教育実践の再解釈—

本章は、文化形成的プロジェクトとしてのメディア教育の可能性を検討した。ここで言う文化

形成的プロジェクトとは、生徒らによるメディア制作が単なる擬似体験ではなく、現実構成の経験となる試みのことである。

H.ジルーとバッキングラムは、メディア（ポピュラー文化）に対する生徒の能動的接触を認める。バッキングラムは、抑圧／自律の二元論に依拠し、自らを自律の立場、ジルーを抑圧の立場へと位置づけるため、この共通点を看過している。

ここで、バッキングラムのスタンスをより明示するため、P.フレイレの意識化概念と理論展開に注目した。『被抑圧者の教育学』に代表される初期において、フレイレは抑圧の意識化を説いていた。意識化とは、「何よりもまず現実の明瞭な知覚を妨げる障害について、人間の蒙を啓くことである」（Freire 2000（1970）:64=1984:117）。これに対してフェミニストらは、フレイレの議論に教師と被抑圧者が同じ現実、同じ抑圧、同じ解放を共有しているという前提を見出し、意識化概念を拡大しようとする。例えばB.フックスは、抑圧者と被抑圧者の対立関係に基づく解放ではなく、その対立関係から排除された黒人女性も参加する授業実践を構想する。

このような批判を受けて、フレイレは現実のヴェールを剥ぐだけでは不十分であり、生徒らの参加を求めるようになる。「生徒らはその参加を通して教えた内容の底にある意味を自分のものにする。教える行為の成立には、教える内容に対する『踏み込み』が求められる」（Freire 2014(1994):70=2001:113）。これが後期フレイレの主張である。

その観点から、バッキングラムによる11歳から12歳の生徒らによる広告制作の実践を検討した。まず5時間をかけて、生徒個人、グループ、そして教師主導で広告分析を行う。例えば、グループワークにおいて生徒は、「広告のターゲットはだれか」などを検討している。その後、生徒らは8時間を使用して、1分間の少年用ヘアケア商品の広告を制作する。

バッキングラムは、この実践を通して生徒がオーディエンス等の諸概念を修得したと解釈する。しかしながら同時に、バッキングラム自身が認めるように生徒らは広告のターゲットを十分に理解し、広告分析に必要な諸概念もすでに修得していた。つまり、彼らはフレイレが言う現実のヴェールを剥いでいる。ここで生徒は、単にシミュレーションを通じた概念学習（現実認識）だけではなく、メディア内部から現実へ介入し、メディア・コンテンツを編集している。生徒は「編集者」の役割を担っている。

第7章 政治的／文化形成的参加型メディア教育としての可能性

そもそもバッキングラムの参加型メディア教育を受けた生徒の多くは、イギリスの支配的な学校文化からこぼれ落ちた成績の悪い生徒であった（Stafford 1990:83）。同時に、彼らはメディア（ポピュラー文化）を学校に持ち込んでくる。ジルーが言うようにラディカルな教育理論はその彼らを看過してきた（Giroux and Simon 1992（1989）:180）。つまり生徒らは、イギリスの支配的な学校文化から疎外され、同時にラディカルな教育理論からも疎外された存在である。この二重の疎

外という点に、ギルロイが注目するイギリス黒人（白人の労働者階級でもなく、移民に代表される黒人でもない）、フックスが注目する黒人女性（白人女性でもなく、黒人男性でもない）と参加型メディア教育へ参加する生徒との共通点を見出すことができる。

もちろん、振り返りと概念学習は、参加型メディア教育の中核に位置づく。しかしながら、ギルロイやフックス、後期フレイレが焦点を当てたのは、むしろその振り返りや概念学習を行うことが困難な人たちであった。そしてギルロイはイギリス黒人、フックスは黒人女性が共同かつ文化的な作業を通して公共圏や文化形成へ参加する姿を描き出した。この視座に基づくならば、生徒らは共同かつ文化的な作業を通してメディアと異なる枠組みで情報を送受信し、現実を構成できる。参加型メディア教育には政治的／文化形成的プロジェクトが並列する二層構造を見出すことができる。

バッキンガムの参加型メディア教育の核心はその学習論にある。具体的には、生徒がメディア・コンテンツの制作を通して概念を修得し、支配的なメディア現実を相対化する。振り返りや概念学習を重要視する意味で、意識化はバッキンガムの学習概念の中心に位置づく。しかしながら、生徒は参加型メディア教育を通して言語に限定されないメディアを使用し、文化的作業を経験する。それらを通してお互いに呼応し合い、情報の送受信の枠組みへ介入し、新たな現実を構成する。参加型メディア教育の学びは、単なる体験や認識を通じた現実構成にとどまらない。文化的作業を通して、現実構成の枠組みへ介入する現実構成の経験と言えよう。

終章 参加型メディア教育の可能性と課題—新たなメディア教育のために

バッキンガムは、カルチュラル・スタディーズの知見に基づき、生徒らが制作活動や自らのメディア経験を振り返り、表象やオーディエンス等の概念を学ぶ授業を構想した。その可能性は、概念学習を通してメディアが提供する現実を社会的に再構成することにある。しかしながら、振り返りや概念学習の重要性を認めつつも、メディア内存在としての生徒が授業内で行う活動もまたメディアの構築物である。生徒の活動の含意を検討することに、参加型メディア教育の課題はある。

本研究は、文化的作業という概念に注目して、バッキンガムによる参加型メディア教育に内在しつつも、彼自身はその時代制約や理論的射程の問題で捉えていない参加型メディア教育の二層構造を描き出した。この二層構造を手がかりにすれば、メディア教育は、管理（保護、ルールの修得）、意識化（リテラシーの修得やコンテンツの制作）ではなく、メディア内存在としての生徒が現実構成のあり方（枠組みとコンテンツの双方を含む）を構築する試みとして再構成できる。

確かに SNS が社会に浸透する時代と本研究で取り上げたバッキンガムによる参加型メディア教育が展開された時代の差異はメディア教育のあり方を検討する上で不可欠である。しかしながら、その現代においてもメディアを介した疎外が生じ、抑圧の中で生徒らは社会的現実を構成し

ている。むしろ、多くの人が社会的現実を構成できる時代だからこそ、メディア教育において教師とクラスメイトらと行う現実構成の経験は必要と考える。さらに、文化的作業と概念学習の連続性で生じるこの経験は中産階級も含めたメディア社会を生きる広い範囲の生徒にインパクトをもつ。

本研究では2010年代以降、主に消費社会と子どもの関係を探究しているバッキンガムの考えを十分に考察できていない。本研究が明示した参加型メディア教育の可能性と課題がこれらといかに関連するのかについては今後の課題としたい。

IV 参考文献

(1) 主要引用・参考文献

- Buckingham, D. (1986) Against Demystification: A Response to "Teaching the Media", *Screen* (5), 80-95.
- (1987) *Public Secrets: EastEnders and Its Audience*, BFI.
- (1993a) *Changing Literacies: Media Education and Modern Culture*, Tufnell Press
- (1993b) *Children Talking Television: The Making Television Literacy*, Routledge Falmer.
- (1993c) Conclusion: Re-Reading Audience, D.Buckingham ed., *Reading Audiences*, Manchester University Press, 202-216.
- (1993d) Introduction: Young People and the Media, D.Buckingham ed., *Reading Audiences*, Manchester University Press, 1-23.
- (1996) Critical Pedagogy and Media Education :A Theory in Search of a Practice, *Journal of Curriculum* 28 (6) , 627-650.
- (1998) Media Education in the UK: Moving Beyond Protectionism, *Journal of Communication* 48 (1) , 33-43.
- (2000) *After the Death of Childhood: Growing up in the Age of Electronic Media*, Polity.
- (2003a) Introduction: Fantasies of Empowerment? Radical Pedagogy and Popular Culture, D.Buckingham ed., *Teaching Popular Culture: Beyond Radical Pedagogy*, Routledge, 1-17.
- (2003b) Media Education and the End of the Critical Consumer, *Harvard Educational Review* 73 (3) , 309-327.
- (2003c) *Media Education: Literacy, Learning and Contemporary Culture*, Polity.
(= (2006) (鈴木みどり他訳)『メディア・リテラシー教育—学びと現代文化—』世界思想社。
- (2003d) Pedagogy, Parody and Political Correctness, D.Buckingham ed., *Teaching Popular Culture: Beyond Radical Pedagogy*, Routledge, 63-87.
- (2003e) Questioning the Media: A Guide for Students, UNESCO, 1-16.

- http://www.amarc.org/documents/articles/buckingham_guide.pdf (2017年11月22日閱覽)
- (2003) 1st. publish 2000) *The Making of Citizens: Young People, News, and Politics*, Routledge.
- (2005) *The Media Literacy of Children and Young People: A Review of Literature*, Center for the Study of Children, Young and Media, Institute of Education, University of London.
- (2007) Selling Childhood?: Children and Consumer Culture, *Journal of Children and Media*, 1 (1) , 15-24.
- (2008) Children and Media: A Cultural Studies Approach, K.Drontner and S.Livingstone eds., *The International Handbook of Children, Media and Culture*, Sage, 219-236.
- (2010) Interview by Dee Morgenthaler, Friday, Oct. 29. Voices of Media Literacy: International Pioneers Speak: David Buckingham Interview Transcript, Center for Media Literacy, 1-8.
http://www.medialit.org/sites/default/files/Voices_of_ML_David_Buckingham.pdf (2017年8月29日閱覽) .
- (2011) *The Material Child: Growing up in Consumer Culture*, Polity.
- (2013) Challenging Concepts: Learning in the Media Classroom, P.Fraser eds., *Current Perspectives in Media Education: Beyond the Manifesto*, Palgrave Macmillan, 24-40.
- (2014) Guest Editorial The Success and Failure of Media Education, *Media Education Research Journal* 4(2), 5-18.
http://merj.info/wp-content/uploads/2014/01/MERJ_4-2-Editorial.pdf (2017年8月29日閱覽)
- Buckingham,D. and I.Harvey (2001) Imaging the Audience: Language, Creativity and Communication in Youth Media Production, *Journal of Educational Media* 26 (3) , 173-184.
- Buckingham,D and J.B.Martínez (-Rodrigues) (2013) Interactive Youth: New Citizenship Between Social Networks and School Settings, *Comunicar* 40, XX, 10-13.
- Buckingham,D. and J. Sefton-Green (1994) *Cultural Studies Goes to School: Reading and Teaching Popular Media*, Taylor&Francis.
- Buckingham,D. and J.Sefton-Green (2001) Multimedia Education: Media Literacy in the Age of Digital Culture, R.Kubey ed., *Media Literacy in the Information Age: Current Perspectives*, Transaction Publishers, 285-305.
- Buckingham,D. and J.Sefton-Green (2003) Gotta Catch 'em All: Structure, Agency and Pedagogy in Children's Media Culture, *Media, Culture & Society* 25 (3) , 379-399.
- Buckingham, D., J.Grahame and J.Sefton-Green (1995) *Making Media: Practical Production in the Media Education*, English and Media Centre.
- Buckingham,D. and K.Jones (2001) New Labour's Cultural Turn: Some Tensions in Contemporary Educational and Cultural Policy, *Journal of Educational Policy* 16 (1) , 1-14.

- Buckingham,D. and M.Scanlon (2003) *Education, Entertainment and Learning in the Home*, Open University Press.
- Buckingham,D.,P.Fraser and N.Mayman (1990) Stepping into the Void: Beginning Classroom Research in Media Education, D.Buckingham ed., *Watching Media Learning: Making Sense of Media Education*, The Falmer Press, 19 -59.
- (2) 関連文献
- Dancan,B. (2007) Global Teens: Marketing, Politics and Media Education, A.Nowak et al. eds., *Rethinking Media Education: Critical Thinking and Identity Politics*, Hampton Press, 97-111.
- Department for Education and Employment (1999) *English: National Curriculum for England*.
- Ferguson,B (1981) Practical Work and Pedagogy, *Screen Education* 38, 42-55.
- Ferguson,R (1996) 2000, *Continuum* 9 (2) , 58-77.
- (1998) *Representing 'Race'*, Arnold.
- Freire,P. (1996 1st publish 1970) *Pedagogy of the Oppressed*, Penguin Books. (= (2011) (三砂ちづる訳)『新訳被抑圧者の教育学』亜紀書房)。
- (2014 1st publish 1994) *Pedagogy of Hope*, Bloomsbury. (= (2001) (里見実訳)『希望の教育学』太朗次郎社エディタス)。
- Gilroy,P. (2002 1st publish 1987) *There Ain't No Black in the Union Jack: Cultural Politics of Race and Nation*, Routledge. (= (2017) (田中東子他訳)『ユニオンジャックに黒はない—人種と国民をめぐる文化政治』月曜社)。
- (1993b) *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, Harvard University Press. (= (2006) (上野俊哉他訳)『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識』月曜社)。
- Giroux, H. (1988) *Teachers as Intellectuals: Toward a Critical Pedagogy of Learning*, Bergin and Garvey Publishers. (= (2014) (渡部竜也訳)『変革的知識人としての教師—批判的教授法の学びに向けて』、春風社)。
- (1992) *Border Crossings: Cultural Workers and the Politics of Education*, Routledge.
- (1997) *Education and Cultural Studies: Toward a Performative Practice*, Routledge.
- Giroux,H.and R.Simon (1992 1st publish 1989) Popular Culture as A Pedagogy of Pleasure and Meaning, H.Giroux *Border Crossings: Cultural Workers and the Politics of Education*, Routledge, 180-206.
- Grahame, J. (1995) Original Copy: Re-Selling Sounds, D. Buckingham, J. Grahame and J. Sefton-Green *Making Media: Practical Production in Media Education*, English and Media Center, 105-139.

- Hall,S. (1980) *Encoding/Decoding*, S.Hall et. al., eds., *Culture, Media, Language*, Routledge, 128-138.
- (1986 1st publish 1980) *Cultural Studies: Two Paradigms*, Collins,R.,et. al.,eds., *Media, Culture and Society: A Critical Reader*, Sage, 33-48.
- (1988) *The Hard Road to Renewal :Thatcherism and the Crisis of the Left*, Verso.
- (2007 1st publish 1973) *Encoding and Decoding in the Television Discourse*, A.Gray et. al.,eds., *CCCS Selected Working Papers Volume 2*, Routledge, 386-398.
- Hall,S. and P.Whannel (1964) *The Popular Arts*, Hutchinson.
- Habermas,J. (2013 1st publish 1990) *Strukturwandel der Öffentlichkeit*,Suhrkamp (= (1994) (細谷貞雄他訳)『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究 第2版』未来社)。
- (1983) *Moralbewußtsein und Kommunikatives Handeln* ,Suhrkamp. (= (2000) (三島憲一他訳)『道徳意識とコミュニケーション行為』岩波書店)。
- Hoggart,R. (2009 1st publish 1957) *The Uses of Literacy: Aspects of Working-Class Life*, Chatto & Windus. (= (2003 1st publish 1974) (香内三郎訳)『読み書き能力の効用』晶文社)。
- hooks,b. (1982 1st publish 1981) *Ain't I a Woman: Black Women and Feminism*, South End Press. (= (2010) (大類久恵監訳)『アメリカ黒人女性とフェミニズム』明石書店)。
- (1994) *Teaching to Transgress: Education as the Practice of Freedom*, Routledge. (= (2006) (里見実監訳)『とびこえよ、その囲いを—自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社)。
- Jenkins,H. (2009) *Confronting the Challenges of Participatory Culture: Media Education for the 21st Century*, MIT Press.
- (2013) From New Media Literacies to New Media Expertise, P.Fraser eds., *Current Perspectives in Media Education: Beyond the Manifesto*, Palgrave Macmillan, 110-127.
- Leavis,F.R. and D. Thompson (1958 1st publish 1933) *Culture and Environment: The Training of Critical Awareness*, Chatto and Windus.
- Luke,C. (2003) *Critical Media and Cultural Studies in New Times*, T.Lavender eds.,*Global Trends in Media Education: Policies and Practices*, Hampton Pr, 105-117.
- Masterman,L. (1980) *Teaching about Television*, Macmillan.
- (1986) A Reply to David Buckingham, *Screen* 27 (5) , 96-100.
- (1989 1st publish 1985) *Teaching the Media*, Routledge. (= (2010) (宮崎寿子訳)『メディアを教える—クリティカルなアプローチへ』世界思想社)。
- (2001) A Rational for Media Education, R.Kubey ed., *Media Literacy in the Information Age: Current Perspectives*, Transaction Publishers, 15-68.

- (2010) INTERVIEW by DEE MORGENTHALER, Nov. 3. *Voices of Media Literacy: International Pioneers Speak* : Len Masterman Interview Transcript, Center for Media Literacy: 1-10.
http://www.medialit.org/sites/default/files/VoicesMediaLiteracyLenMasterman_1.pdf (2017年8月29日閲覧)
- Martinez-de-Toda, J. (2003) *The Active Approach in Media Education*, T.Lavender eds., *Global Trends in Media Education: Policies and Practices*, Hampton Pr, 149-172.
- Morley, D. (1980) *The Nationwide Audience: Structure and Decoding*, BFI.
- Stafford, R. (1990) *Redefining Creativity: Extended Project Work in GCSE Media Studies*, D.Buckingham ed., *Watching Media Learning: Making Sense of Media Education*, The Falmer Press, 81-100.
- The Advisory Group on Citizenship (1998) *Education for Citizenship and the Teaching of Democracy in School*, Final Report of the Advisory Group on Citizenship, Qualification and Curriculum Authority, 1-86. (= (2012) (鈴木崇弘他訳)「シティズンシップのための教育と学校で民主主義を学ぶために」長沼豊他編『社会を変える教育—英国のシティズンシップ教育とクリック・レポートから』KS21、111-209)。
- Turner, G. (2003 1st publish 1990) *British Cultural Studies*, Routledge. (= (1999) (溝上由紀他訳)『カルチュラル・スタディーズ入門—理論と英国での発展』作品社)。
- Williams, R. (2013 1st.publish 1961) *The Long Revolution*, Parthian. (= (1983) (若松繁信他訳)『長い革命』ミネルヴァ書房)。
- 市川秀之 (2013)『ヘンリー・ジルーのクリティカル・ペダゴジーの批判的継承』学位請求論文、名古屋大学大学院教育 発達科学研究科、1-119。
- 伊藤守 (2014)「オーディエンス概念からの離陸—群衆からマルチチュードへ、移動経験の理論に向けて」伊藤守他編著『アフター・テレビジョン・スタディーズ』せりか書房、304-327。
- 今井康雄 (1998)『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想—メディアのなかの教育』世織書房。
- (2004)『メディアの教育学—「教育」の再定義のために』東京大学出版会。
- (2014)「学習の経験とメディアの物質性—「示すこと」の教育理論に向けて」『教育哲学研究』109号、1-7。
- ウィリアムズ, R. (2016 1st publish 1983) (山田雄三訳)「成人教育と社会変化」R.ウィリアムズ (川端康雄他訳)『想像力の時制』みすず書房、229-246。
- 上杉嘉見 (2008)『カナダのメディア・リテラシー教育』明石書店。
- 上地完治 (1997)「ジルーの批判的教育学に関する一考察—『差異』と公共領域」『教育哲学研究』第75号、47-59。
- (2011)「道徳授業における『教え込み』と可謬主義」『道徳教育方法研究』第17号、1-10。

- 小柳和喜雄他（2002）「英国のメディア教育の枠組みに関する教育学的検討—メディア・リテラシーの教育学的系譜の解明を目指して」『教育方法学研究』第28巻、199-210。
- 砂川誠司（2009）「メディア・リテラシーの授業における感情を伴う〈振り返り〉の必要性—D.Buckinghamの学習モデルの検討を通して」『国語科教育』（第66号）、35-42。
- （2011）『国語科におけるメディア・リテラシー観の探究』学位請求論文、広島大学大学院教育学研究科、1-261。
- 早川操（1995）「教育的アナキニズムの展開—解放とエンパワーメントをめざす批判的教育学」杉浦宏編『アメリカ教育哲学の動向』晃洋書房、301-317。
- 水越敏行他編（1996）『変わるメディアと教育のあり方』ミネルヴァ書房。
- 毛利嘉孝（1997）「暴力と音楽—ポール・ギルロイの音楽論」『現代思想』第25巻第11号、青土社、202-213。
- （1998）「インディペンダント・インタヴェンション—ホールの70年代」『現代思想』第26巻第4号、青土社、208-221。
- 森本洋介（2014）『メディア・リテラシー教育における「批判的」な思考力の育成』東信堂。
- 矢野智司（2014）『幼児理解の現象学—メディアが開く子どもの生命世界』萌文書林。
- 山田雄三（2005）『感情のカルチュラル・スタディーズ—「スクリーティニ」の時代からニュー・レフト運動へ』開文社出版。
- （2013）『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち—英語圏モダニズムの政治と文学』松柏社。
- 吉見俊哉（1998）「メディア・リテラシーと学びの実践」佐伯胖他編『岩波講座現代の教育第1巻いま教育を問う』岩波書店、237-262。
- （2001）「経験としての文化 言語としての文化」吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』せりか書房、22-40。
- （2003）『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院。
- 渡邊満（2015）「シティズンシップ教育とこれからの道德教育」小笠原道雄編『教育的思考の作法 教育哲学の課題「教育の知とは何か」—啓蒙・革新・実践』福村出版、282-298。